

学生の学校給食支援ボランティア活動による意識変化と教育効果

Educational Effect and Change in Consciousness of Students through School Lunch Support Volunteer Activities at Elementary Schools

(2013年3月31日受理)

北島 葉子 楨尾 幸子 影山 智絵 村上 淳
Yoko Kitajima Sachiko Makio Chie Kageyama Jun Murakami

Key words : 学校給食支援ボランティア, 学校給食, 給食時食(栄養)教育, 教育効果, 意識変化

要 旨

本研究では、「学校給食支援ボランティア活動」の取り組みについて述べ、加えて参加学生に対し実施内容についてのアンケート調査を行い、ボランティア活動による意識変化と教育効果を検討した。

アンケート調査項目は、活動プログラム、活動前、活動中、活動後に対する自己評価等について質問項目を設定した。これらの回答について、回答者の活動への期待感および目的の理解度の視点より、学生のボランティア活動を通じての意識変化と教育効果について比較検討した。

その結果、全体では活動への期待感については、期待感を持つ者が半数であった。また、活動の目的の理解については、6割の者が良い傾向にあると回答した。

「学校給食支援ボランティア活動」による意識変化と教育効果については、活動への期待感と活動の目的の理解の状況によって左右される可能性が高いことが分かった。今後この活動を効果的に展開するには、活動前の期待感と目的の理解を高めることが非常に大切であり、そのための工夫を加える必要があると考えられた。

I はじめに

中国学園大学は、平成14年4月に栄養士養成課程を改組し、管理栄養士養成課程を開設して以来、地域と連携し、地域の社会的課題の解決に貢献することを進めてきた。本学部では、栄養教諭制度発足の平成17年度より栄養教諭の養成を行い、同時に小学校における学校給食時に限った学生のボランティア支援活動を開始し、今まで奨励してきた。

食育基本法¹⁾では国民運動としての食育の推進が提唱され、文部科学省の食に関する指導の手引²⁾には、「食は人間が生きていく上での基本的な営みの一つであり、健康な生活を送るためには健全な食生活は欠かせないものです。しかしながら、近年、食生活を取り巻く社会環

境の変化などに伴い、子どもに食生活の乱れや健康に関して懸念される事項、例えば、偏った栄養摂取や不規則な食事などの食生活の乱れ、肥満や過度の痩身などが見られるところであり、また、増加しつつある生活習慣病と食生活の関係も指摘されています。このように望ましい食習慣の形成は、国民的課題となっています。特に、成長期にある子どもにとって、健全な食生活は健康な心身をはぐくむために欠かせないものであると同時に、将来の食習慣の形成に大きな影響を及ぼすもので、極めて重要です。」と記載されており、中でも小・中学校における地域での食育推進が果たす役割に大きな期待が寄せられている。

このことをもとに、地域に存在する社会的課題について管理栄養士養成課程を設置している本学が果たせる役

割を模索した際、学生が大学近隣小学校の教育活動に協力して、地域や家庭の食生活改善へ繋がる小学生の給食時間の食育を支援することが考えられた。この給食時間の支援を通して児童生徒の食生活を取り巻く状況等の改善に貢献することは、近年の開放的な小学校教育を地域の様々なマンパワーが支えていくという視点にも合致し、大いに望まれていることでもあると考えられた。加えて、前述のような形で学生が地域実践・貢献活動を実施することは、第一に大学で学んでいる食や栄養にかかわる専門的知識および技術を役立てられるということ、第二に人間性や社会性の醸成を望むことができるということ、第三に学生の管理栄養士になるために必要な目的意識を確立させ、将来管理栄養士で活躍するための知識・技能に関する大学での学びに対して関心と理解を深めること（キャリア教育の一環）などが期待でき³⁾、当時大学での座学との相乗的教育効果は大きいと考えられたため実施をしてきた⁴⁾。

そこで、本稿では、まず本学部学生の専門性を生かした、大学近隣小学校に於ける「学校給食支援ボランティア活動」の取り組みについて、開始当初以来の経緯を紹介する。加えて「学校給食支援ボランティア活動」を経験した学生に対し、活動プログラムに関する内容7項目、活動前に関する内容2項目、活動中に関する内容5項目、活動後に関する内容5項目、全19項目の活動内容に関するア

ンケート調査票を作成し、配布の上その場で回答・回収し集計解析を行い、意識変化や教育効果などについて若干の考察を行ったので報告をする。

II 「学校給食支援ボランティア活動」の概要と実施経緯

II.1 活動者と対象者、活動場所および実施時間

「学校給食支援ボランティア活動」については、本学部に在籍する3年生および4年生が、徒歩あるいは自転車で行動することが可能な範囲の大学近隣の小学校3校に在籍する1, 2, 3年生を対象に実施してきた。活動時間は小学校までの移動時間を含めた時間として、11時頃から14時30分頃までの約3時間で、当該期間において学生一人あたり2～4回の活動を行った。2008～2012年度の活動実績についての詳細を表1に示す。

II.2 活動内容

主に給食時間とその前後の時間帯を活動時間として、給食時間帯には、「給食時支援」と「給食時食（栄養）教育」の2つの側面からの支援活動を必須活動とした。その上で、給食時間後の休憩時間等には、子ども達とのふれあいにより信頼感や親近感を構築するように努めることとし、毎年実施してきた。

表1 2008～2012年 学校給食支援ボランティア活動実績

	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年
学校数	2校 ^{*1}	3校 ^{*2}	2校 ^{*1}	2校 ^{*1}	2校 ^{*3}
実施期間	4/16～7/16	4/15～7/15	4/14～7/14	4/27～7/13	5/8～7/17
実施曜日	月・水曜日	月・水曜日	月・水曜日	火・水曜日	火曜日
担当学年	1, 2	1, 2	1, 2	1, 2	1～3
担当クラス数	19	20	13	8	10
学生数/支援一回	19	20	26	12	20
実施週数	12, 9	9, 11, 11	11, 10	10, 9	10, 9
参加学生の学年	3・4	3・4	3・4	3・4	3・4
延べ参加学生数	333	299	262	116	190
参加学生数合計	85	69	81	64	67
期間中担当回数/一人	3.9	4.3	3.2	1.8	2.8

^{*1} 岡山市立R小学校, K小学校

^{*2} 岡山市立R小学校, K小学校, Z小学校

^{*3} 岡山市立K小学校, Z小学校

II. 2. 1 給食時支援

給食時支援の具体的な活動内容は、基本的に配属されたクラスの担任教諭の指導方針に従っている。給食の準備としては、給食当番の児童に、エプロンやマスクの適切な着用や、手洗いをするよう声をかけて行動を促し、その後整い次第、共に食缶などの配膳物を給食室まで取りに行くことと、給食当番以外の児童に対しては、配膳台や机の上を拭くなどの教室内の準備を行うように声かけを行い、行動を促すことである。

配膳時には、学年によって配膳作業の馴化に違いがあるため、主に給食に慣れていない1年生については、ご飯や汁物など児童のみでは配膳が難しい料理の分配作業の支援を行い、2年生及び3年生の配膳作業に慣れている児童に対しては、一人分の量や盛り付け方の工夫などのアドバイスを行っている。写真1, 2, 3に給食時支援の活動の様子を示す。



写真1 給食時支援の様子



写真2 給食時支援の様子



写真3 給食時支援の様子

II. 2. 2 給食時食（栄養）教育

給食時食（栄養）教育は、一人の学生が2～4回の活動を行ううちの1回を指導日と決めて実施している。給食時食（栄養）教育を実践するに当たり、3年次のカリキュラムの中に事前学習の時間（管理栄養士専門演習Ⅰの一部）を設け、指導案の立案や指導媒体の作成の時間に充てている。指導案の立案に関しては、担当教員によって、題材設定や時間配分が適切か、内容に工夫があるかなどについて助言・指導を行い、学生が計画する食（栄養）教育内容について支援している。その後、担当する給食支援ボランティア活動日までに幾度か模擬授業を行わせ、適切な言葉遣いができているか、対象児童が理解できる表現ができているか、媒体は適切かなどの点について確認を行い、給食支援ボランティア活動日を迎えることになる。活動日の学生は、児童と共に給食を食べながら子どもたちとコミュニケーションを図り、児童の社会性の醸成を促し、また、その日の給食に使われている食材や料理の説明を行い、加えて食べ残しを無くすことや箸の使い方などの食事マナーについてもアドバイスを行うなどの活動を行っている。

給食時食（栄養）教育とは、給食摂食時直前および最中あるいは直後において、5～10分程度の時間を使用し、食と健康に関する指導を行うことである。その具体的な内容として、平成24年度は、「食べもののはたらきを知ろう」、「お米のよいところを知ろう」、「よくかんで食べよう」、「にんじんのはたらきを知ろう」といった題材名で食（栄養）教育を行った。

これらのうち、以下に「お米のよいところを知ろう」の指導案の概要を示す。指導対象は低学年である。

(1) 題材名：「お米のよいところを知ろう」

目標：お米の良いところを知り、1粒も残さずお米を食べようとする

ねらい：お米のよいところを知ろう

- 1) 毎日食べている白いものは何かを発表する。
- 2) お米の良いところがわかる。
- 3) 一杯の茶碗に何粒のお米が入っているかを知り。
- 4) お米を一粒も残さず食べようとする意欲を持つ。

方法：

- 1) 毎日食べている白いものは何かを問い、お米は毎日、長期間食べられているのに飽きられていない事を説明する。
- 2) お米の良いところがわかるようにする。
 - ・クイズに参加させることで、お米の良さを自ら考えるきっかけとする。
 - ・2つの良いところ、「熱や力となってエネルギーになる」、「持続力がある」を伝える。
- 3) 一粒一粒の大切さを気づかせる。
 - ・一杯の茶碗に何粒の米が入っているかクイズを使って分かるように説明する。
- 4) お米を食べる時は、一粒一粒残さず食べるよう励ます。

以上

(2) 給食時食（栄養）教育の様子を写真4に示す。



写真4 給食時食教育の様子

Ⅲ ボランティア活動による意識変化と教育効果の検討

Ⅲ.1 アンケート調査票の概要とその処理

給食支援ボランティアに関するアンケート調査は、2008～2012年のボランティア活動終了後に3年生及び4年生を対象に実施した。アンケートの調査内容は、表2-1、2-2に示す通りで、プログラム評価、活動前自己評価、活動中自己評価、活動後自己評価に対する質問項目で構成されており、「非常に良い、非常に満足、その通り」(5点)から「非常によくない、非常に不満、全くそうでない」(1点)までの5段階の評価尺度で評価を行った。また、給食支援ボランティア活動全般に関する自由記述欄も設け、必要な者は記述を行えるようにした。

本報告では、回収した回答の中から、2008～2012年の3年生（実施時）のみを学年を揃えて分析を行った。

また、集計においては、5段階の評価尺度のうち5点及び4点を「良い傾向にある」としてまとめ、3点を「どちらとも言えない（中間）」、2点及び1点を「良くない傾向にある」としてまとめ、評価に関して回答を3区分とした。今回の調査は、活動終了後に実施したため、いくつかの質問項目については、活動前の自分自身の状況を思い出して記入を行った。さらに、ボランティア活動に参加する以前の意欲や関心度を示す指標と考えられるボランティア活動の前の時点での『ボランティア活動の目的について理解の度合い』の項目を表側項目として、この項目以外を表頭項目として2項目間でクロス集計を行い、ピアソンの χ^2 乗検定により有意差を検討した。

Ⅲ.2 調査結果および考察

Ⅲ.2.1 各質問項目の単純集計結果

2008～2012年の3年生の学校給食支援ボランティア活動についてのアンケート結果（5段階の各尺度の割合）を表2-1、2-2に示す。

2.1.1. ボランティア活動前の自己評価に関する項目

『ボランティア活動への期待感』は、「良くない傾向」が20.9%、「どちらとも言えない」が29.7%、「良い傾向にある」が49.5%と、期待感を持つ者が半数を示した。『ボランティア活動への期待感』は、これからボランティア活動を行うために必要なモチベーションを示す指標と考えられ、期待を持って活動すること、すなわち、高いモ

質問項目		1 2		3	4 5		合計
		良くない傾向		中間	良い傾向		
プログラム評価	ボランティア活動に対する教員の説明の評価	2.9 5	17.4 30	30.2 52	36.6 63	12.8 22	100 172
	先輩の体験談聴講の有益性	3.1 5	9.8 16	38.0 62	33.7 55	15.3 25	100 163
	岡山市教育委員会の説明会の有益性	4.1 7	11.7 20	46.2 79	28.1 48	9.9 17	100 171
	ボランティア活動時間の適切度	2.9 5	15.1 26	19.8 34	41.9 72	20.3 35	100 172
	ボランティア活動回数の適切度	3.5 6	16.3 28	29.7 51	33.1 57	17.4 30	100 172
	ボランティア活動時期の適切度	2.3 4	15.2 26	26.9 46	35.7 61	19.9 34	100 171
	配布資料の有益性	2.3 4	17.0 29	40.9 70	30.4 52	9.4 16	100 171

上段%, 下段n

質問項目		1	2	3	4	5	合計
		良くない傾向		中間	良い傾向		
活動前自己評価	ボランティア活動への期待感	8.7	12.2	29.7	26.2	23.3	100
		15	21	51	45	40	172
	ボランティア活動の目的について理解の度合い	2.9	8.7	30.2	43.0	15.1	100
		5	15	52	74	26	172
活動中自己評価	ボランティア活動中のきびきびとした行動	4.1	9.3	31.4	34.9	20.3	100
		7	16	54	60	35	172
	担任の先生や学校職員との連携	3.5	11.6	36.0	32.0	16.9	100
		6	20	62	55	29	172
	子どもたちとのコミュニケーションスキル	2.9	10.5	12.8	46.5	27.3	100
		5	18	22	80	47	172
	グループ内での相互協力	5.8	4.7	22.1	38.4	29.1	100
		10	8	38	66	50	172
	ボランティア活動態度	2.9	7.0	20.9	45.3	23.8	100
		5	12	36	78	41	172
活動後自己評価	ボランティア活動に対する積極性	4.1	5.2	16.9	39.5	34.3	100
		7	9	29	68	59	172
	ボランティア活動を通してのスキルと考え方の定着	4.1	8.1	25.6	37.2	25.0	100
		7	14	44	64	43	172
	ボランティア内容に対する興味や関心	4.7	4.7	16.3	34.3	40.1	100
		8	8	28	59	69	172
	ボランティア活動内容の整理の実行	4.1	12.2	31.4	33.7	18.6	100
		7	21	54	58	32	172
総合評価	ボランティア活動に対する満足度	2.4	12.7	16.9	39.2	28.9	100
		4	21	28	65	48	166

上段%, 下段n

チベーションでボランティア活動に取り組むことは、予想しうるボランティア活動による成果をより多く実感できるものと考えられ、ひいては多くの学びを得ることにつながるものと思われる。

次に、『ボランティア活動の目的について理解の度合い』に対しては、「良い傾向にある」が58.1%と自己評価し、2/3の学生はボランティア活動の目的を十分に理解できていると考えられた。

2.1.2. ボランティア活動プログラムに関する評価

『ボランティア活動に対する教員の説明』については「良い傾向にある」と答えた学生が49.4%、また、『ボランティア活動の体験談を聞く有益性』については「良い傾向にある」と回答した学生が49.0%、『岡山市教育委員会の説明会の有益性』については「良い傾向にある」と回答した学生が38.0%だった。

今回の調査では、目的が理解できていると自己評価する学生の割合が6割であったが、私たちはボランティア活動プログラムを実施するにあたり、その目的を理解するための準備機会を提供している。その第一が、担当教員の説明であり、第二には、岡山県教育委員会から当該大学に出張講義してもらえるボランティア活動登録者説明会であり、公的教育施設にボランティアを希望する者には必須の説明会となっている。第三には、本学上級学年生によるボランティア活動の体験説明会である。学生が有益性を認識した割合が高い順に、本学担当教員の説明、上級学年生の体験談、岡山市教育委員会の説明となった。これらの有益性の認識には、岡山市教育委員会の説明会に制度の概要などを解説する出席義務を伴う拘束イメージがあることや体験談を語る上級学年生の人数が少なかったりしたこと、ボランティア活動に対する期待感などが影響を与えたのではないかと考えられた。なかでも、本学担当教員の説明を、半数の者が十分でないという回答していることを考えると、管理栄養士に必要な社会性およびコミュニケーションスキルの獲得を目指すためとはいえ、ボランティア活動をカリキュラムの一部に含めることに対する否定的な気持ちが影響している可能性も考えられた。そのことに理解を得るには、現在行っていないボランティア活動先の栄養教諭および学校栄養職員や小学校教諭などとの交流会を設けるなど、期待感や目的理解のさらなる向上を目指した新たなプログラムの

追加を検討する必要があるとも思われた。このように、事前の期待感や目的意識を強化することは、学生のボランティア活動に対するモチベーションを高揚させ、その結果、実際の活動で得られる内容が少しづつでも増えていくのではないかと考える。

2.1.3. ボランティア活動中および活動後における自己評価

『ボランティア活動に積極的に取り組めた』と回答した学生は73.8%、『ボランティア活動中にきびきびと行動できた』と回答した学生は、55.2%であった。また、『ボランティア活動の内容に対する興味関心』は、7割の学生が持てたと回答していた。これらのことは、ボランティア活動への期待に対する自己評価や活動の目的に対する理解について、自己評価が低かった学生の中にも積極的に活動し、きびきびと行動でき、活動内容に興味・関心が持てた学生がいたことになる。この度のボランティア活動への参加は総じて自発的な意思決定によるものではないのであるが、ひとたびボランティア活動に参加すると、その活動を通じて自らの行動が役立ったという実感や対人活動から得られる面白さなど、何らかの実感が得られたための変化ではないかと考えられた。このボランティア活動においてどのような教育効果が見られるのかについては、今回の調査票の質問項目の中には組み込んでいないのでこれ以上言及できないが、ボランティア活動への期待感が低く、目的の理解が十分でない場合でも、私たちが意図する教育効果が得られる者も少なからずいた可能性が推察されたため、今後の詳細な検討が必要と思われた。

『ボランティア活動の活動時間』と『ボランティアの活動時期』については、それぞれ62.2%、55.6%の学生が「良い傾向にある」と回答していた。また『ボランティアの活動の回数』については、「良くない傾向にある」が19.8%、「どちらとも言えない」が29.7%、「良い傾向にある」が50.5%となり、『ボランティアの活動の回数』が「良くない傾向にある」とした学生の自由記述について見ると、「2～4回/一人のボランティア活動回数では少な過ぎる」、「もっと沢山活動したかった」というボランティア活動に対して前向きな理由が最も多かった。少なくとも『ボランティア活動の回数』についての否定的回答が全て否定的な内容ではなく、活動回数を注意深く

検討する必要があると思われた。

『小学校の教諭や職員と連携がとれたか』、『子どもたちとうまくコミュニケーションがとれた』、『グループ内での相互協力ができたか』の各項目については、「良い傾向にある」と回答した学生はそれぞれ順に48.9%、73.8%、67.5%であり、7割の学生は、ボランティア活動体験を通じて子どもたちやグループメンバーとの良好な関わりを持つことができたようである。

『ボランティア活動を通して新しい技術や考え方が定着したか』が「良い傾向にある」すなわち「定着した」と回答した学生は62.2%、一方で『ボランティア活動後に活動内容を整理したか』が「良い傾向にある」すなわち「行った」学生は52.3%と半数の者たちであった。ボランティア活動を振り返り経験したことを整理することは、活動の意義やその経験の中での学びをより深く理解するとともに、知識の定着につながると思われる。およそ6割の学生は新しい技術や考え方を得ることができたとしているが、活動内容を整理できていない学生が多いことは残念なことである。事後学習として活動記録紙を配布し提出させることやグループごとに活動内容を振り返らせて発表の機会を設けているため、内容を整理しているはずであるが、調査では、学生各自が整理した自覚がないことを意味するような結果となり、自分自身が体験した活動内容を自発的に進んで振り返っていないことが窺われた。これでは、ボランティア活動を通して体験した技術や知識の定着に繋がっていないのではないかと危惧された。今後は用意されたことだけをするのではなく、自らが進んで、自分の意志で活動を振り返りまとめていくことができるようなプログラムを検討する必要があると思われた。

『ボランティア活動に対する満足度』は、「良い傾向にある」すなわち「満足だった」と回答した学生が68.1%であった。これらの学生は、ボランティア活動の経験を通じて、自らのボランティア行動が人に役立ったということが実感できた者たちであると思われる。

III. 2. 2 クロス集計分析結果

アンケート調査の単純集計結果より、『ボランティア活動への期待感の自己評価』と『ボランティア活動の目的の理解の自己評価』の程度が学生の意識変化、教育効果に影響を及ぼす可能性があることが推察されたため、

今回は、『ボランティア活動の目的の理解』とその他のそれぞれの項目間でクロス集計を行った。

プログラムに関する項目では『教員からの説明評価』、『体験談聴講の有益性』、『岡山市教育委員会の説明会の有益性』、そして活動中に関する項目の自己評価としては、『きびきびとした行動』、『小学校教職員との連携』、『子どもたちとのコミュニケーションスキル』、『グループ内での相互協力』、『ボランティア活動態度』、さらに活動後に関する項目では、『ボランティア活動に対する積極性』、『スキルと考え方の定着度』、『ボランティア内容に対する興味・関心』、『活動に対する満足度』に区分されるが、それらに関する回答についてボランティア活動の目的に対する理解とクロス集計した結果を表3、表4、表5に示す。

プログラムに関する項目では、活動の目的について理解できていた学生は、活動に対する教員の説明は十分であるとした者は66.0%、また先輩による体験談の聴講や岡山市教育委員会の説明会も有益だったと回答した者は、それぞれ60.4%、50.5%であった（表3）。

活動中に関する自己評価項目では、活動の目的について理解できていた学生は、きびきびとした行動がとれたとしており（66.0%）、小学校の教職員と連携もとれ（60.0%）、子どもたちともうまくコミュニケーションもとれ（82.0%）、グループ内での相互協力ができ（80.0%）、ボランティアの活動態度も良かった（77.0%）と自己評価していた（表4）。

活動後に関する項目間では、活動の目的について理解できていた学生は、積極的に活動に取り組み（89.0%）、活動を通して新しい技術や考え方が身に着き（79.0%）、活動内容に興味・関心を持つことができ（94.0%）、活動に対する満足度も高い（80.4%）という結果になった（表5）。

このように、学校給食支援ボランティア活動の目的について理解が高かった学生は、プログラムに関する有益性やボランティア活動中に関する自己評価、活動後に関する項目のすべての事柄において、肯定的な良い傾向を示していた。ボランティア活動前の目的理解の程度は、ボランティア活動を通しての学生の意識変化およびスキルや考え方に影響を与えている可能性が示唆され、学生の学校給食支援ボランティアについての理解度を高める

表3 目的理解とプログラムに関する項目との関係

		教員からの説明の評価				先輩の体験談聴講の有益性				岡山市教育委員会の説明会の有益性			
		1	2	3	合計	1	2	3	合計	1	2	3	合計
活動の目的に対する理解	良くない傾向	66.0 12	30.0 6	10.0 2	100 20	26.3 5	52.6 10	21.2 4	100 19	45.0 9	50.0 10	5.0 1	100 20
	どちらとも いえない	28.8 15	38.5 20	32.7 17	100 52	22.9 11	39.6 19	37.5 18	100 48	21.2 11	51.9 27	26.9 14	100 52
	良い傾向	8.0 8	26.0 26	66.0 66	100 100	5.2 5	34.4 33	60.4 58	100 96	7.1 7	42.4 42	50.5 50	100 99

統合評価尺度 1: 良くない傾向, 2: どちらともいえない, 3: 良い傾向

上段%, 下段n

ピアソンの χ^2 検定($P < 0.001$)

表4 目的理解と活動中に関する項目との関係

		きびきびとした行動				小学校教職員との連携				子どもたちとのコミュニケーションスキル			
		1	2	3	合計	1	2	3	合計	1	2	3	合計
活動の目的に対する理解	良くない傾向	50.0 10	35.0 7	15.0 3	100 20	60.0 12	20.0 4	20.0 4	100 20	55.0 11	15.0 3	30.0 6	100 20
	どちらとも いえない	17.3 9	32.7 17	50.0 26	100 52	17.3 9	44.2 23	38.5 20	100 52	15.4 8	9.6 5	75.0 39	100 52
	良い傾向	4.0 4	30.0 30	66.0 66	100 100	5.0 5	35.0 35	60.0 60	100 100	4.0 4	14.0 14	82.0 82	100 100

		グループ内での相互協力				ボランティア活動態度			
		1	2	3	合計	1	2	3	合計
活動の目的に対する理解	良くない傾向	40.0 8	35.0 7	25.0 5	100 20	40.0 8	30.0 6	30.0 6	100 20
	どちらとも いえない	17.3 9	23.1 12	59.6 31	100 52	11.5 6	19.2 10	69.2 36	100 52
	良い傾向	1.0 1	19.0 19	80.0 80	100 100	3.0 3	20.0 20	77.0 77	100 100

統合評価尺度 1: 良くない傾向, 2: どちらともいえない, 3: 良い傾向

上段%, 下段n

ピアソンの χ^2 検定($P < 0.001$)

表5 目的理解と活動後に関する項目との関係

		ボランティア活動に 対する積極性				スキルと考え方の定着度			
		1	2	3	合計	1	2	3	合計
活動の 目的に 対する 理解	良くない傾向	50.0 10	35.0 7	15.0 3	100 20	45.0 9	50.0 10	5.0 1	100 20
	どちらとも いえない	11.5 6	21.2 11	67.3 35	100 52	11.5 6	36.5 19	51.9 27	100 52
	良い傾向	0.0 0	11.0 11	89.0 89	100 100	6.0 6	15.0 15	79.0 79	100 100
		ボランティア内容に対する 興味や関心				活動に対する満足度			
		1	2	3	合計	1	2	3	合計
活動の 目的に 対する 理解	良くない傾向	55.0 11	30.0 6	15.0 3	100 20	73.7 14	10.5 2	15.8 3	100 19
	どちらとも いえない	9.6 5	30.8 16	59.6 31	100 52	14.0 7	22.0 11	64.0 32	100 50
	良い傾向	0.0 0	6.0 6	94.0 94	100 100	4.1 4	15.5 15	80.4 78	100 97

統合評価尺度 1:良くない傾向, 2:どちらともいえない, 3:良い傾向 上段%, 下段n
ピアソンの χ^2 検定(P<0.001)

ことが非常に重要であることが明らかとなった。

III. 2. 3 調査結果からみる今後の調査方法の課題

今回の調査では、ボランティア活動前の意識についての質問と活動後の意識についての質問が混在した構成となっており、この活動前後の質問が混在しているアンケート調査を、活動終了後に行った。そのため、活動前の意識に関する質問とそれ以外の質問との間にバイアスが生じた可能性も否定できない。今後は、質問項目を整理し、活動前と活動後の内容に分け、活動の前後でアンケート調査を行い、結果を検討する必要があると考えている。

IV ま と め

本稿では、本学部生の学習内容の専門性を生かして実施する、近隣小学校での「学校給食支援ボランティア」活動の取り組みについての内容および経緯紹介を行い、それによって得られる様々な学びについての効果等の測

定をアンケート調査で実施し、以下の結果を得た。

- ・『活動への期待感』は、良い傾向とした期待感を持つ者が半数であった。
- ・『活動の目的の理解』は、6割の者が良い傾向にある（理解できている）と回答した。
- ・『活動の体験談を聞くことや説明会の有益性』は、5～6割の者が良い傾向にある（有益だった）と回答した。
- ・『活動に積極的に取り組めたか』や『きびきびと行動できた』は、5割ないしは7割の者が良い傾向にある（積極的にきびきび動けた）と回答した。
- ・『活動の内容に興味や関心が持てた』は、7割を超える者が良い傾向にある（興味・関心が持てた）と回答した。
- ・『活動時間と活動時期の適切度』は、6割の者が良い傾向にある（活動時間、時期とも適切だった）と回答した。
- ・『活動の回数の適切度』は、半数の者が良い傾向（適切な回数だった）と回答した。
- ・『小学校教職員と連携』は、半数の者が良い傾向にある（先生方とうまく連携ができた）と回答した。

- ・『子どもたちとのコミュニケーションスキル』は、7割を超える者が良い傾向にある（子どもたちとうまくいった）と回答した。
- ・『グループでの相互協力』は、7割の者が良い傾向にある（相互協力できた）と回答した。
- ・『新しい技術や考え方の定着』は、6割の者が良い傾向にある（定着している）と回答した。
- ・『活動後の活動内容の整理』は、半数の者が良い傾向にある（実施している）と回答した。
- ・『活動の満足感』は、7割の者が良い傾向にある（活動内容に満足した）と回答した。
- ・ボランティア活動の目的に対する理解が良い傾向にある学生は、プログラムに関する項目の教員からの説明評価、体験談聴講の有益性、岡山市教育委員会の説明会の有益性、活動中に関する項目の自己評価として、きびきびとした行動、小学校教職員との連携、子どもたちとのコミュニケーションスキル、活動態度、グループ内での相互協力、活動後に関する項目のスキルと考え方の定着度、満足度、積極性、ボランティア内容に対する興味・関心とそれぞれの項目間で良い傾向にあると回答しており、全ての項目について、ピアソンの χ^2 検定を行った結果、有意な差（ $P < 0.001$ ）がみられた。

以上のことから、学生の学校給食支援ボランティア活動による意識変化と教育効果は、活動の目的の理解の状況によって左右されている可能性が大きいことが示唆された。したがって、活動前の期待と目的の理解を高めることが非常に大切であり、今後、プログラムの内容や教育手法などを検討していく必要が考えられた。

【参 考 文 献】

- 1) 食育基本法：前文、総則
- 2) 文部科学省：「食に関する指導の手引」―第1次改訂版―（平成22年3月）
- 3) 桜井政成：「地域活性化ボランティア教育の深化と発展：サービス・ラーニングの全学的展開を目指して」、立命館高等教育研究第7号 pp. 21-40
- 4) 高早苗，北島葉子，村上淳，林英生：「学生の学校給食支援ボランティア活動によるサービス・ラーニ

ング」，中国学園紀要第7号（2008）pp. 31-38